

書評

黒崎周一著

『ホメオパシーとヴィクトリア朝イギリス
の医学——科学と非科学の境界』

(刀水書房、2019年)

小宮 彩加



私たちは「コロナ禍」の真っ只中にある。グローバリズムの波に乗ってあつという間に世界中に広がった新型コロナウイルスとの戦いは、いまだに終わりが見えない。ワクチンも特効薬も出来ておらず、私たちは息を潜めて生活をしながら、薬をも掴みたい気持ちである。そんな中、3月に新型コロナウイルスに感染していたチャールズ皇太子が、ホメオパシーとアーユルヴェーダの治療で回復したとニュースで報じられた。ホメオパシーにはプラシボ以上の効果はないというのが一般的な科学的見解ではあるが、不安の渦巻く世の中で、ホメオパシーのコロナ対策の「レメディ」にすがりたくなる人も増えているに違いない。実際、ヴィクトリア朝時代には、コレラが流行した際にホメオパシーの効果が喧伝され、従来の医学の脅威になるほどの人気を博すようになっていたのである。

ホメオパシーというのは、もともとドイツのザムエル・ハーネマンが「類似の法則」をもとに体系化した理論と、それに基づく治療法である。ギリシャ語の“homo (同じ)”と“pathie (治療する)”から造られた名称で、健康時に服用してその病気と同様の症状を引き起こすものがその病気の治療に有効な薬品と考える。つまり、「毒をもって毒を制す」式の治療だ。本書は、ホメオパシーの人気の高かったヴィクトリア朝イギリスで、医学について通常行われていた「正統」対「異端」の境界設定と、それとは別に引かれた「寛容」対「不寛容」という境界設定に着目するものである。

本書は全8章からなる。第一章「ホメオパシー、イギリスに来たる」では、イギリスでホメオパシーが広まり始めた1830年代から40年代の状況を概観している。自由放任主義^{レッセ・フェール}の風潮が強く、免許の取得が義務化されておらず、

また無免許医の取締りも厳しくなかった時代の医師免許制度の問題、内科医、外科医、薬剤医の社会的地位の格差問題、さらには患者獲得競争の問題について論じている。そんな中、非正規医療を行うホメオパシー医は、「インチキ医者」として非難的になったのだという。しかし、正統医学の治療法にも非難される点が多々あった。正統医療では、瀉血（四体液説で病気の原因と見ている不要な体液を排出するために気を失うほどの血液を抜くこと）や、下痢や嘔吐を引き起こす劇薬の頻用、薬物の多剤投与と過剰投与をするので、患者がホメオパシー治療を選ぶことも多かったのだ。イギリスにおけるホメオパシー普及に関して特徴的だったのは、医師免許を取得したホメオパシー医が主導していた点だそう。正統医学の医師と同じような医学教育を受け、同じように学位を持っていたのである。それだからなおのこと、境界線を引くことに躍起になったのだと理解できた。

第二章「ホメオパシーを排除せよ」では、正統医学が、異端医学との間に明確な境界線を引こうとした時代のことが書かれている。1823年創刊の雑誌『ランセット』や地方内科外科医協会（のちの英国医師会）が中心となって、ホメオパシーを排斥しようとする動きがあったそう。正統医学の医師の中には、頭ごなしに否定せずに、ホメオパシーの治療法を実践してみる者や、ホメオパシーが自然回復力を促す点を認める論文を書く者もいたが、1850年前後には、ホメオパシー支持者への医師免許や学位の交付を禁じようするなどして、なんとしてもホメオパシーとの間に明白な境界線を引こうとしたのだ。さらに1858年の医師法制定に向けた医師制度改革を進めていく中で、正統医学はホメオパシーを非合法化しようとしたが、自由放任主義^{レッセ・フェール}の時代だったため、そうはならなかったのだという。

第三章「競争なくして進歩なし」は、ホメオパシー普及に一役買った、篤志病院や診療所の開設についてである。その際、医学界の外の人々は、ホメオパシーと正統医学の争いには関わりたくないと中立の立場を取ることが多く、ホメオパシーとの一切の交流を断とうとした正統医学は、「労働組合的」だと批判された。

第四章「ホメオパシーは商機」では、先行研究ではあまり触れられていない薬剤師を取り上げている。薬剤師は顧客の要望のままに調合するので、

薬剤師がホメオパシー薬品を販売しても「共犯者」にはならなかったようだ。この章で興味深かったのは、ホメオパシク・ココアに関する節である。ラウントリ、フライ、キャドベリなどの代表的なチョコレートメーカーは、いずれも、ホメオパシク・ココアなるものを製造していたようだ。ホメオパシクと言っても特に薬効があるわけではなく、単に他のものよりもよく売れるようにそのように命名されたい。現代では偽装と非難されるだろうが、当時はホメオパシク紅茶、ホメオパシー石鹸、ホメオパシー洗髪剤などもあったというから、その商魂逞しさには脱帽である。

第五章「ホメオパシーを再構築する」では、希釈と攪拌を繰り返せば繰り返すほど薬品の霊的な潜在能力が引き出されるというハーネマンの教えをもとに、「天文学的な希釈と攪拌を実施するグループ」と、「活性化を否定し、薬を薄めるための緩やかな希釈のみを行う折衷主義的なグループ」に二分した、ホメオパシー支持者の内部対立が境界設定にどう作用したかを論じている。また、第六章「治療を科学する」では、正統医学側が自分たちの治療法について抱いていた深刻な疑念を考察している。

第七章「医学に『正統』は存在しない」は、保守党党首で元首相のディズレーリの死の床の周りで起こった、正統医学対ホメオパシーの争いを取り上げている。こんなことが実際にあったのかと驚いた。1881年春、76歳のディズレーリは喘息と痛風の症状に見舞われ、命が危険な状態になっていた。主治医J・キッドの依頼があって、胸部疾患の権威であるR・クエインと、クエインの知人の内科医J・M・ブルース、さらに数日後には女王の侍医である内科医ジェンナーも治療に加わったのだが、最初から診ていた主治医のキッドがホメオパシー医であったことで事態はややこしいことになってしまったのだそうだ。正統医学の医師たちは、ホメオパシー医の依頼を一度断ったり、キッドと同席し対診を行うことを拒んだりして、頑なに正統医学とホメオパシーの境界線を守ろうとしていた。その結果「ディズレーリは医師の慣習のために死んだ」と一般紙には書かれ、正統医学の排他性や、非科学的姿勢を非難する声が強くなっていったのだ。そして、正統医学の中からも、ホメオパシー排斥の見直しを進め、「寛容」・「不寛容」の境界を受容する動きが出てきたのだという。

第八章「医師の一派『アロパシー』」では、ホメオパシー医たちが正統医

学に「アロパシー」という造語を与えたことと、その影響を考察している。ホメオパシーとアロパシーを並べることで、双方とも「正統」な医学の一部であるという印象を植え付け、また「アロパシー」という言葉が宗教や政治など、医学以外の分野にも頻用されるほど定着したことにより、「寛容」「不寛容」の境界線の構築に影響を与えたのだという。

以上が各章の概要である。本書は博士論文として書かれたものをもとにしてのことであるが、当時の資料を豊富に使っており非常に丁寧な論文である。『ランセット』は当然のことながら、正統医学派、ホメオパシー派双方の医学系新聞や雑誌だけでなく、これまであまり注目されていなかったという薬剤師向けの学術誌などにもくまなく焦点を当てているため、当時の医学界の状況についての広汎な議論には説得力があると感じた。これだけの資料をまとめ上げるのは至難の技であったろう。一つ難点を指摘するとすれば、あらゆる側面を平等に取りあげているがために、読みやすい章とそうでない章があったことだろうか。各章の内容の充実度にばらつきがあるように感じた。

また、ホメオパシーが当時多くの文学者に支持されていたことを考えると、文学作品や手紙にも触れて欲しいと思った。例えば、本書第一章にも登場するホメオパシー医F・F・クインは、チャールズ・ディケンズの親しい友人であり、ディケンズの子供の一人の名付け親でもあった。ディケンズ自身もホメオパシー信奉者であり、ホメオパシク・ココアを愛飲していたこともわかっている。また、モルヴァンにあるJ・M・ガリー医師の施設には、多くの著名人が治療を求めて訪ねてきていたようだ。チャールズ・ダーウィンは、『種の起源』を出版する前の1849年に長期滞在して、ガリー医師のハイドロパシーとホメオパシーによる治療を受けていた。そのほかディケンズ、ブルワー・リットン、テニスン、ナイチンゲール、ジョージ・エリオットなどもガリー医師のもとで治療を受けている。『自助論』で有名なサミュエル・スマイルズに至っては、もう少しでホメオパシー医になったかもしれないところだった。彼はエディンバラ大学で医学を学んでから故郷に戻って開業したのだが、小さな町にはすでに7人も開業医がいたため、文筆で身を立てることになったのだった。スマイルズは、ロンドンでホメオパシー医のエプス博士(本書136ページにも登場)に会った時に、

リーズで素晴らしい働き口があるからホメオパシー医に転向するよう勧められていた。スマイルズ自身はホメオパシーには賛同できなかったので、悩んだ末、申し出を断ったのだった。(Samuel Smiles, *The Autobiography of Samuel Smiles*, Cambridge, 2013, pp. 80-81)。これらの作家や文筆家は、ホメオパシーについて、また正統医学との論争について、どのように書いていたのだろうか。気になるところである。

—明治大学教授